

Title	序：問題は社会的慣性である
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.23, 2002.3 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4085
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

序 — 問題は社会的慣性である —

聖学院大学総合研究所所長 大木 英夫

むかし或る王が、人民の不穏な動きを見て、「これは叛乱か」と聞いた、それに対して家臣は「王よ、これは革命である」と答えたという話がある。今日の日本に起こっている変化について、ひとは何と云うだろうか。「構造改革」だという。しかし、「王よ、これは革命である」。われわれもそう言わねばならない。

それを明治維新になぞらえてはならない。というのは、この革命は、明治維新を「革命」することではなければならないからである。明治維新は、疑似近代化であった。その「疑似」性が今日の行き詰まりとなつて現れた、それが今日の日本の状況である。政治家や評論家は、サッチャーやレーガンの改革を引き合いに出す。根本が違う。彼らが企てたことは、すでに革命によつて成立した近代社会を、今日グローバルゼーションと言われる世界史的潮流へと再調整することであつた。イギリスもアメリカも、どちらも近代社会の前提としての「革命」を経ている社会である。日本にはその前提がない。「慣性」あるいは「惰性」(inertia)とは、外力が加えられない限りものがその運動状態を持続する

という性質を意味する。それを社会に転用するならば、近代社会とは、革命をもって社会的惰性を破り、それを動き出させ、そして産み出された社会的動態である。ところが、日本の近代化は革命なしであつた。だから、根底に社会的慣性が残つた。しかもその慣性は制度的に構造化した。だから日本では、それを打破し、新しく動かすことが容易ではないのである。構造化された社会的慣性とは、政治家、あるいは政官業の癒着構造である。その社会的慣性が、今日の構造改革を妨げる。問題はとくに「官僚機構」である。だから、その構造改革は、明治維新へ戻ることでありえない。戻つてはならない、いや、もし戻るなら、今日の社会的慣性をその原点において打破するため、革命するためでなければならぬ。

先ごろ埼玉県知事と会つたら、しきりに中央政治の腐敗を嘆いておられた。この知事はむかし参議院議長であつた。最近の参議院議長は辞職した。問題は、どうして明治維新の廃藩置県の中央集権体制を、いま議論されているような税制改革をもって地方自治へと転換できるかということである。

近代は、革命をもつて始まつた。それは、社会的惰性を打破する転回 (revolution)、社会の深層にまで及ぶ変革であつた。間違つてはならない、今日日本が直面している課題は、明治維新になぞらえられるような「改革」ではない、「王よ、これは革命である」、しかもそれを「内戦」のような流血なしに達成するのではない。東洋の諸国では、中国は革命を経た、韓国もそれに当たる変化を経験した。日本にはその基礎条件が欠けている。日本は、いま、遅ればせの革命を迎えている。それはたとい長い時間を要するものとなるにせよ、実質は革命である。緩慢なる革命である。今日求められることは、そのことをまず自覚することではないかと思う。安易な課題ではないからである。